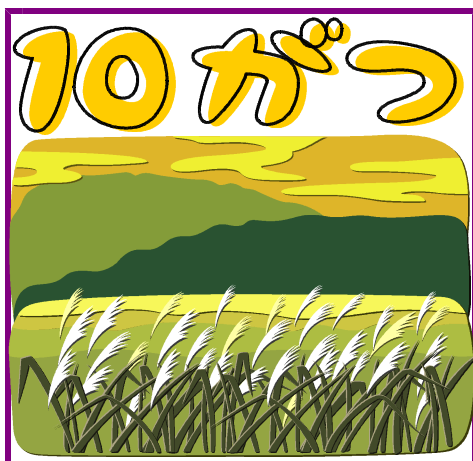


めぐみイエス・キリスト教会

2022年10月30日(日)第五主日礼拝
週報「通算第631号」



2022年標題聖句

第 I テモテへの手紙御6章17節～19節

《高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませて下さる神に望みを置き、善を行ない、立派な行ないに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】

【賛美Ⅰ】 新聖歌21「輝く日を仰ぐとき」 p. 28

【交読文】 No.24 詩篇第67篇 p. 898

【賛美Ⅱ】 新聖歌320「世の波風に」 p. 508

【使徒信条】

【主の祈り】

【先週説教】

【賛美Ⅲ】 オリジナル曲No.1「主の御前に」

【聖書朗読】 創世記22章1節～14節

【礼拝説教】 《主の山に備えあり(アドナイ・イルエ)》

【聖餐式】

【賛美Ⅳ】 新聖歌165「栄光イエスにあれ」 p. 235

【平和祈り】

【頌 栄】 新聖歌63 「父・御子・御霊の」 p. 85

【祝祷後奏】

※聖書箇所 創世記22章1節～14節(旧約p. 34上段)

22:1 これらの出来事の後、神がアブラハムを試練にあわせられた。神が彼に「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は「はい、ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

22:3 翌朝早く、アブラハムはろばに鞍をつけ、二人の若い者と一緒に息子イサクを連れて行った。アブラハムは全焼のささげ物のための薪を割った。こうして彼は、神がお告げになった場所へ向かって行った。

22:4 三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた。

22:5 それで、アブラハムは若い者たちに、「おまえたちは、ろばと一緒に、ここに残っていなさい。私と息子はあそこに行き、礼拝をして、おまえたちのところに戻って来る」と言った。

22:6 アブラハムは全焼のささげ物のための薪を取り、それを息子イサクに背負わせ、火と刃物を手に取った。二人は一緒に進んで行った。

22:7 イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」彼は「何だ。わが子よ」と答えた。イサクは尋ねた。「火と薪はありますが、全焼のささげ物にする羊は、どこにいるのですか。」

22:8 アブラハムは答えた。「わが子よ、神ご自身が、全焼のささげ物の羊を備えてくださるのだ。」こうして二人は一緒に進んで行った。

22:9 神がアブラハムにお告げになった場所に彼らが着いたとき、アブラハムは、そこに祭壇を築いて薪を並べた。そして息子イサクを縛り、彼を祭壇の上の薪の上に載せた。

22:10 アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。

22:11 そのとき、【主】の使いが天から彼に呼びかけられた。「アブラハム、アブラハム。」彼は答えた。「はい、ここにおります。」

22:12 御使いは言われた。「その子に手を下してはならない。その子に何もしてはならない。今わたしは、あなたが神を恐れていることがよく分かった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しむことがなかった。」

22:13 アブラハムが目を上げて見ると、見よ、一匹の雄羊が角を藪に引っかけていた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の息子の代わりに、全焼のささげ物として献げた。

22:14 アブラハムは、その場所の名をアドナイ・イルエと呼んだ。今日も、「【主】の山には備えがある」と言われている。

●ポイント1. 「試練から学ぶこと」とは？

※第 I コリント10章13節「使徒パウロの勧め」 (新約p.340下段)

●ポイント2. 「神にとって」とは？

※ルカの福音書1章37節「御使いガブリエルの言葉」 (新約p.108上段)

1:37 「神にとって不可能なことは何也不会あります。」

◎先週の礼拝メッセージ【アソスからミレトスへ】

《港町トロアスから、「私たち」は船に乗り込んだとありますが、パウロは、アソスまでの25キロを陸路をとりました。この時、ルカ本人とは別行動であったことが分かります。陸路を選んだその理由については、聖書には書かれてはいません。さて、無事パウロはアソスにて、エルサレムに行く仲間たちと合流します。そして、そこから船に乗り、ミティレネ、サモスを経てミレトスに向かいます。パウロは、あえてエペソに寄らず、アジア州でエペソに次ぐ大都市である「ミレトス」に立ち寄ります。パウロはそこから、使いをやってエペソ教会の長老たちを呼びよせます。後年パウロは、再びこのミレトスを訪れています。

ところで、なぜパウロはエルサレム行きを急いでいたのでしょうか。それは、異邦人教会の指導者である長老たちと共に、その所属する教会からの献金を直接届けてエルサレム教会を励ます為なのです。

また、その焦点を「五旬節」と定めていたのは、まさに聖霊降臨日こそが、実は異邦人教会が誕生した瞬間だからです。その時、数千人のディアスポラが大きな物音を聞いて、ヨハネ・マルコの家を集まって来ました。そして、シモン・ペテロのメッセージを聞いて、三千人の兄弟が救われたのです。この時が、真の意味において教会の始まりであり、異邦人教会へと繋がって行く原点となります。パウロは、常に「聖霊」を強調します。この時、聖霊の時代が始まりました。

現在の教会が、ペンテコステをお祝いするように、エルサレム教会も「五旬節」を大切にしていたのではないのでしょうか。そして、そのお祝いの時に、異邦人教会の長老たちが、自ら赴いて、尊い献金を手渡したとしたら、困窮の中にある、エルサレム教会はどんなに励まされ勇気づけられたことでしょうか。私たちは、他のクリスチャンを励ますことができるのです。「与えなさい。そうすれば与えられるのです。」》

お知らせ

※11月6日(日)第一主日礼拝は、お休みとなります。よって、次回は、11月13日(日)の第二主日礼拝となります。通常通り午前中です。